

学生から見た地域の強み再発見
in 平内

令和 3 年度

地域アセスメント事業研究報告書

令和 4 年 3 月

目次

第Ⅰ章 研究プロジェクトの全体像.....	1
1. 研究の趣旨.....	1
2. 研究方法.....	2
(1) 聞き取り対象の選定	
(2) 学生による聞き取り内容及び方法	
3. 聞き取り調査結果の概要.....	4
(1) 聞き取り対象活動	
(2) 一連の活動の限界と課題	
第Ⅱ章 町内の活動の聞き取り内容.....	5
1. 伝統芸能保存の取組.....	5
2. 藤沢活性化協議会.....	7
3. 松緑神道大和山の地域貢献活動.....	10
4. 地域おこし協力隊.....	12
5. 若手農家の取り組みのサポート（農政課）.....	14
6. 白鳥を守る会.....	15
7. ほたての祭典.....	17
8. ブルーロードライド.....	18
9. 地域学校協働活動.....	19
10. コミュニティバス.....	21
11. 地域おこし婦人の会.....	22
12. 資料提供を受けた団体（聞き取り未実施）.....	24
第Ⅲ章 平内町における地域資源の分析と活用.....	25
1. 現状から見えた課題と可能性.....	25
2. 平内町の活動で協同できる可能性.....	25
(1) 周知の工夫による活動の維持	
(2) 活動の担い手不足と高齢化	
3. まとめ－暮らしやすい平内に向けて－.....	30
編集後記.....	31

第1章 研究プロジェクトの全体像

1. 研究の趣旨

本研究は、青森県型地域共生社会実現に向けた取り組みの一つとして構想された。事業内容に上げられた三つの柱のうちの一つ「②大学等と協働した地域アセスメント」(図1)について、青森県立保健大学が受託した研究事業である。

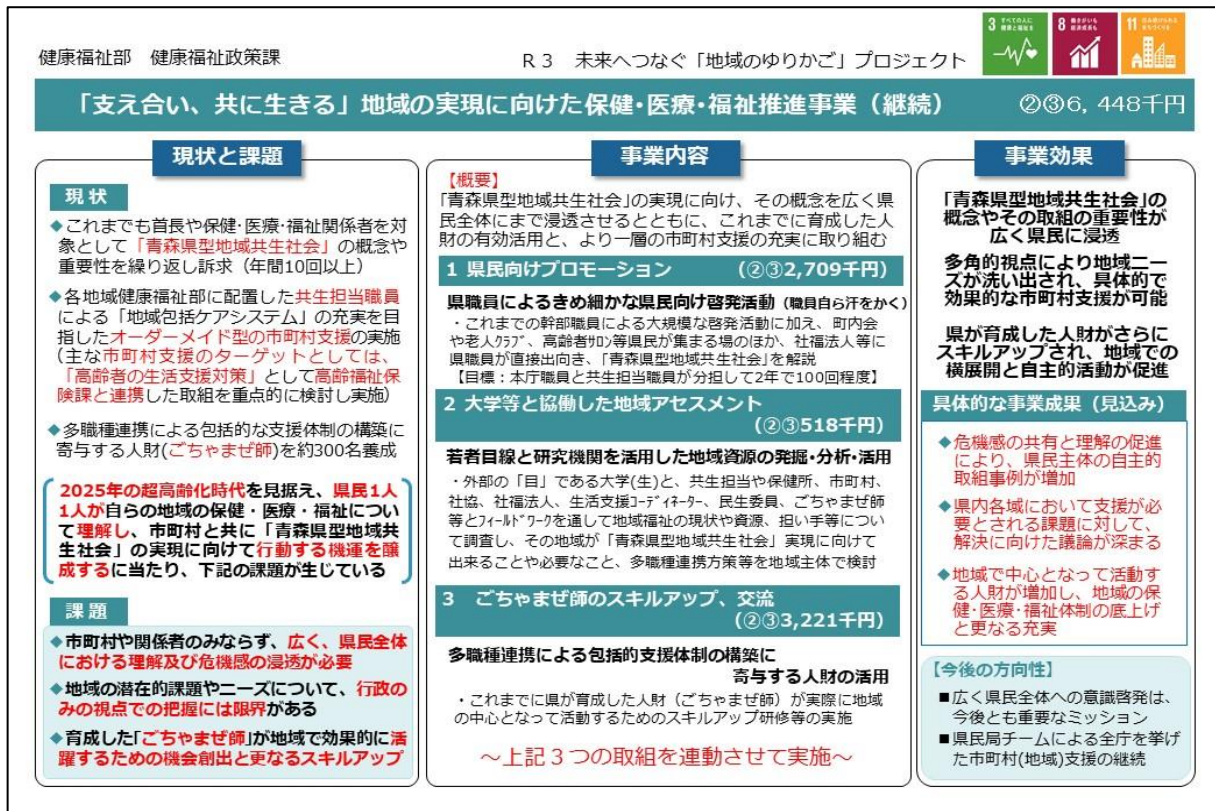


図1：令和3年度 青森県型地域共生社会実現に向けた事業

事業として構想されていた趣旨は、学生が地域における様々な取り組みについて調査し、共生社会の実現に向けてできることや必要なこと、多職種連携の方策を探ることである。

そこで本研究は、地域に既にあるモノ（様々な分野の活動）を発掘及び再発見し、捉えなおすことを目的とした。地域資源については、既に自治体における様々な省庁主導の補助事業を基にした活動や種々の団体の理念に基づく地域貢献活動が展開されている現状がある。それらを新機軸から捉えなおし、繋ぎなおすことで新たな地域資源としての役割を期待できる側面がある。そして、それらを無視した新たな活動の創出はコストの浪費すらもたらすことにもつながるといえる。これらの現状から、本研究では新たな活動を創り出すことではなく、様々な地域活動に対して新機軸から捉えなおすローカルイノベーションを主軸として計画した。さらに、捉えなおしの観点の創造性を高めるため、福祉や保健医療にとどまらず地域の活力になると考えられる取り組みや集いの場も対象にすることとした。

2. 研究方法

(1) 聞き取り対象の選定

本研究では、委託者である青森県担当者と協議の上、聞き取り調査の期間及び実施可能性に鑑み、平内町の取り組みを対象とすることとした。委託契約前後から、聞き取り対象の選定までの一連のプロセスを表1に示す。

表1：聞き取り対象活動の選定までのプロセス

時期	内容	備考
2021 年 10 月	平内町役場との事前協議 平内町内の取り組みの全体像について聞き取り 委託契約詳細について検討	
11 月	平内町役場及び社会福祉協議会への事前聞き取り 平内町内の取り組みの全体像について補足聞き取り 聞き取り対象活動の候補について聞き取り 学生プロジェクトメンバー募集 本研究及び事業の全体像の説明 聞き取り方法のレクチャー 平内町フィールドワーク	受託契約
12 月	聞き取り対象活動の選定 対象活動担当者へ聞き取りの趣旨説明及びアポイントメント 学生プロジェクトメンバーの聞き取り準備 聞き取り内容の精査 聞き取りチーム分けとスケジュールの調整	
2022 年 1 月	聞き取り調査開始 対象活動担当者へのアポイントメントも継続	
2 月	聞き取り調査	
3 月	聞き取りデータのまとめ、報告書執筆	

11月の受託契約後、12月から学生プロジェクトメンバーとの作業を開始し聞き取り内容の精査と方法についてレクチャーした。また、地域性が理解できるよう平内町の基本情報について共有した。調査期間は、2022年1月～2月である。

(2) 学生による聞き取り内容及び方法

聞き取り内容は、学生プロジェクトメンバーによる起草を基に、研究代表者が助言しながら精査した。表2に学生プロジェクトメンバーが作成した聞き取り内容の想定を示す。

表2：学生プロジェクトメンバーによる聞き取り項目の想定

基本情報	・活動地区名，住所　・活動名称の確認 ・活動目的
活動内容	・主な活動内容（内容，開催頻度，参加者（参加者の集め方，年齢層，男女比，職業など），参加費（あれば），会場，運営費内訳，物品管理 ・現在の活動状況（コロナの影響，活動がどう変わったか，コロナの前後比較） ・活動期間　・活動のきっかけ　・活動を展開するにあたっての工夫 ・協力，連携機関
情報提供 者の思い	・活動をやってよかったこと，活動したことによる効果（人や環境への影響） ・活動の魅力，やりがい　・活動に対する希望，今後の展望

聞き取り方法は、これらを基本とする半構造化面接を採用した。さらに、それぞれの対象となる活動の特性に応じて聞き取り項目を追加及び削除し実施した。聞き取り時間は、一つの活動及び担当者に対して概ね30分～1時間程度であり、学生プロジェクトメンバーは2～3名でチームを作り、記録を取りながら実施した。さらに、聞き取りで作成した記録は、常にプロジェクトメンバー全体で共有し、学生メンバーが担当する活動以外の聞き取り情報も把握できるよう進めた。

3. 聞き取り調査結果の概要

(1) 聞き取り対象活動

表 3 に、平内町役場及び社会福祉協議会からの聞き取りを基に作成した聞き取り対象候補及び聞き取り実施状況を示す。

表 3：事前聞き取りから作成した聞き取り対象候補と聞き取り実施状況

No	分類※	活動・団体など	実施 ※2	No	分類	活動・団体など	実施
1	健康	いきいきサロンもうら		11	地域	若手農家の取り組み	△
2	健康	外童子のサロン		12	地域	白鳥を守る会	○
3	健康	赤坂台のサロン		13	地域	生涯学習	
4	地域	伝統芸能保存の取組	○	14	地域	ほたての祭典	○
5	地域	藤沢活性化協議会	○	15	地域	ブルーロードライド	○
6	地域	集いの場としての商店		16	地域	地域学校協働活動	○
7	地域	もつけ衆		17	地域	コミュニティバス	○
8	地域	松緑神道大和山	○	18	地域	地域おこし婦人の会	○
9	地域	商工会青年部		19	福祉	白鳥ホーム	
10	地域	地域おこし協力隊	○	20	福祉	なつどまり	

※：聞き取り対象活動について領域を横断できるよう、便宜的に分類した。

健康：健康増進・介護予防など 福祉：社会福祉関係の地域活動など

地域：地域振興，産業進行，文化継承，地域おこしなど

※2： ○：聞き取り調査を実施できた活動及び団体

△：活動をサポートする役場職員への聞き取りのみ実施

聞き取り対象候補とした 20 の団体及び活動のうち、11 件について聞き取りを実施できた。調査実施に至らなかった理由には、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から訪問を控えた対象が 6 件、調査期間内の実施が見込めず依頼に至らなかった対象が 3 件であった。

(2) 一連の活動の限界と課題

本研究の最大の限界と課題は、調査と分析期間の短さにある。学生プロジェクトメンバーによる聞き取りスケジュールの調整だけでなく、新型コロナウイルス感染症の状況により延期を余儀なくされたケースもあり、調査期間の余裕の無さが調査実施団体の件数に影響した。また、聞き取り調査の依頼にも一定の時間を要したことから、調査後のデータや解釈のアイディアについて議論する時間的余裕が少なく、3月中のまとめ作業はひっ迫したスケジュールでの作業であった。さらに、健康増進や社会福祉団体による取り組みの聞き取りが実施できなかったことも本研究の課題の一つに挙げられる。多様な分野の活動について調査する目的は、これらの対象を含めたデータを得られれば、よりその達成度を高められたといえる。ただし、そのような現状にあっても地域振興に関する取り組みに関する複数の聞き取りデータを得られたことは、本研究の成果として意義があるものといえる。

第Ⅱ章 町内の活動の聞き取り内容

1. 伝統芸能保存の取組

①情報提供者

生涯学習課 畑井さん

②活動内容

表 4 に伝統芸能保存会に既存する計 14 の団体名を示す。

表 4：伝統芸能保存会の団体一覧

保存会名称	平内町民族無形文化財
松野木剣舞踊り保存会	○
藤沢獅子舞保存会	○
内童子獅子舞・太刀振り保存会	○
小豆沢権現舞保存会	
東田沢権現舞保存会	
狩場沢権現舞保存会	
間木権現舞保存会	
東滝権現舞・餅搗き踊り保存会	
茂浦権現舞保存会	
浦田稲荷神社伝統芸能保存会	
外童子駒踊り保存会	
山口権現保存会	
稲荷権現舞保存会	
愛宕神社権現舞保存会	

14 の団体のうち 3 つの団体が指定団体として認定されており、地区ごとにそれぞれの団体があることはとても珍しいことである。また、各団体に代表者がおり、町の伝統を守り続けている。

この活動は、伝統芸能を後世に残すことを目的としており、地区ごとに保存会が存在している。平内町の伝統芸能は、かつて、家ごとに役割があり、主にお正月に無病息災等の願いが込められていた。また、外童子駒踊りは女性がメインの芸能であり、その他の芸能は男性がメインで昔から担ってきた。中でも、松野木剣舞踊りは 130 年前から続く町の無形文化財指定団体である。各団体の活動のほかに、二年に一度伝統芸能の発表会が 1 月に平内町勤労青少年ホームで行われ、参加費は無料で様々な伝統芸能を観ることができる。

③活動の課題

伝統芸能の維持には、お金（町からの助成金）も必要だが、何より人（担い手）が必要不可欠である。各保存会の担い手不足と継承者の高齢化が課題となっている。一度絶えてしまったものを復活させるのは困難であるため、現在は町からの助成金も利用しながら活動そのものを残すために伝統芸能を譜面化して形に残すことに力を入れており、各地区の伝統芸能の DVD 作成を進めている。担い手の面では、畑井さん曰く、伝統をその家で引き継いでいたのが少子化や地元離れにより引き継ぐ人がいなくなっていることや地域の子どもに教えることが少なくなってきた

いることが影響しているということだった。また継承者は、高齢化に伴う継承の限界だけでなく、働き世代の人が担い手に教えようと思っても仕事で忙しく、なかなか教えるタイミングが合わないことも影響している。これらのことから、団体の中には今まで男性のみでやっていたものに女性も参加可能にするなど取り組みが変化しているところもある。

④活動の展望

平内町の伝統芸能に対して誇りと「残していきたい」という強い思いを持つ人がある。その思いを実行に移す住民の熱意と協力的なところは、これからも保存の取り組みを進めていくにあたって強みであるといえる。そして、



平内伝統芸能保存会について畑井さんから聞き取りをしている様子
その働きかけをしていく際に、町の無形文化財に指定されており補助金の確保が出来ている団体があることも強みといえる。また、2年に1度恒例の発表会は、保存会メンバーの伝統芸能と保存に対するやりがいや意欲向上、平内町の住民が伝統芸能を知るきっかけに繋がっているといえる。

⑤情報提供者の思い

畑井さんの見解として、修行の必要な職人系の職業は引き継ぎづらくなりやすいと聞いた。若いうちにそれらに触れてもらうために小学生のジョブタウン（職業体験）に伝統工芸といった職人系の仕事を入れた結果、小学生が伝統工芸に興味関心を持つきっかけになったことから、その中に伝統芸能も入れてはどうかと畑井さんは模索中であつた。また、担い手が地域住民でないと地域に馴染むまでに時間がかかり、なかなか受け入れにくいことがあるため、町外の伝統芸能に興味関心のある人にも担い手になってもらうこともいいのではないかと考えていた。伝統芸能に限らず、まずは知らない人が知るきっかけに触れることが何かを残し続ける上で大切であると話していた。

⑥聞き取りから感じたこと

DVDに残すなど熱心に活動している方や保存会員だけでなく、伝統芸能に対して誇りを持っている地区の方もいるからこそ、現在まで伝統が引き継がれていると感じた。また、自治体ごとに踊りが残っていること自体が貴重なことであり、強みであると考えた。そこから、昔から平内町になじみのある伝統芸能を映像として残すことは、譜面化するだけでなく平内の伝統と娯楽を守ることに繋がると考えた。

2. 藤沢活性化協議会

①情報提供者

藤沢活性化協議会事務局長 森田さん、町企画政策課 柴田さん

②活動内容

藤沢活性化協議会は、平内町藤沢地区の住民 12 名で構成されている。平成 26 年、地域づくりの先進地である秋田県の大館市や五城目町へ視察に行き、「住民の団結力が強く、地域活動に参加する人が多いという魅力がある藤沢にも活性化協議会を作りたい」と感じたそうである。また、同年に青森県が進める青森県集落経営再生・活性化事業のモデル地区に平内町藤沢地区が選定された。このことがきっかけとなり、平成 27 年に藤沢活性化協議会が立ち上げられた。地域の活性化といきいきとした地域づくりを目的として、藤沢コミュニティセンターにて「藤沢にある面白いものは何か」ということを地域の人たちで話し合い、直売所ふんちゃの運営やハタケシメジの栽培、過去にはインターンシップを行っていた。コロナ以前は月に 1 回集まり反省会や情報交換を行っていたが現在はコロナの影響で集まるのが難しい状況である。表 5 に藤沢活性化協議会が行っている活動とその内容を示す。



藤沢活性化協議会の森田さんと柴田さんとの聞き取りの様子

表 5：藤沢活性化協議会の活動の概要

活動名称	概要
直売所ふんちゃ	これまでの住民間の話し合いで生まれた活動の一つが直売所ふんちゃの運営である。ローソン平内藤沢店に隣接している直売所ふんちゃは、住民同士の野菜のお裾分けをお金に代えられないかというアイディアから生まれた。7月から11月までの期間、朝7時から100円均一で無人販売を行っている。開店前の朝6時半から行列ができるほどの人気があり、年間250万円ほどの売り上げがある。平内町に住む人だけでなく、遠方からも多くの人が直売所ふんちゃに訪れる。
ハタケシメジの栽培	独立行政法人林業研究所と連携して生産技術の共同開発を行い、むつ小川原地域・産業振興プロジェクトの助成金を活用して、ハタケシメジの試験栽培も行っている。森田さんは、ハタケシメジはあまり量が取れなく栽培が難しいが今年こそは試験栽培を成功させて、ふんちゃへ安定的に出荷できるようにしたいと話していた。
地域づくりインターンシップ	平成27年と平成28年に藤沢のいいところの再発見を目的にやインターンシップを受け入れた。インターンシップ期間が終わった後も、直売所ふんちゃの側面看板を制作するためにゴールデンウィークを利用して製作した。インターン生が作成した看板デザイン案をもとに、地域の子どもたちが色塗りを行った。
いんでねえかふんちゃ	平成26年8月からの藤沢の取り組みの様子を紹介するパンフレットである。獅子舞継承に関わる講習会や直売所ふんちゃの開設、多世代交流夏祭りの開催、先進地視察などの取り組みの様子が記載されている。また、藤沢のいいところや藤沢の課題、藤沢全戸を対象に実施したアンケート結果、藤沢の理想の将来像、1年の活動の評価などが記載されている。

藤沢活性化協議会では藤沢地区で行える面白いことは何かを話し合うなど自ら出来ることを考え、活動している。その結果、表に示した活動を実現させることができ、地区を盛り上げることに繋がった。

③活動の課題

藤沢活性化協議会を引っ張ってくれるような後継者がいないことが課題として挙げられた。また、直売所ふんちゃの商品の安定した供給の実現と直売所ふんちゃの会員を増やすための取り組みが課題であると聞いた。

④活動の展望

ピザ窯に屋根をかけて子どもたちの集まる場所を増やし、多世代の住民たちが交流できる場所にしていきたい。また、実家の農家を継ぐためにUターンしてきた30代の方が、八幡宮夏祭りなどに友人たちを藤沢に呼んでくれていた。藤沢へ興味を持ってくれる若い世代との交流ができる夏祭りだが、ここ数年はコロナウイルス感染症の影響で開催ができなかったため、今年は夏祭りを開催したいとおっしゃっていた。加えて、ふんちゃへハタケシメジを安定的に供給することで、品数を豊富に取り揃えている販売所へとしていきたい。このような活動を通して、藤沢を視察に来てもらえるような場所にしたい。

⑤情報提供者の思い

森田さんは地域が変化していく姿をみられること、住民たちの意識が変化すること、活動内容が記事に掲載されることがやりがいであるが、後継者がいないことが課題であると話していた。今後も地域で集まることができる場所づくりなど、藤沢をより良い地域にするための活動を行っていきたいとのことだった。

柴田さんは事業を通して藤沢の人々に関わり、藤沢に住んでいる人はバイタリティーがあり、行動力が高いことが印象に残っていると話していた。また、藤沢や平内町を視察に来てもらえるような町にしたいとのことだった。

⑥聞き取りから感じたこと

藤沢活性化協議会では、住民で藤沢のいいところや課題、理想の将来像について話し合い多くの活動を行っている。その中で藤沢の面白いところを発見できていることから、住民は藤沢についてよく知っていると感じた。加えて、課題に対して住民自身が当事者意識を持ち、その解決に向けて積極的にアイデアを出している点も含め、活動力があり住民主体の地区であると言える。また、藤沢地区は青森県集落経営再生・活性化事業のモデル地区に選定されていることから、補助金の活用の経験がありいろいろな活動に挑戦しやすいことが強みであると考えた。秋田県などの地域づくりの先進地を訪ね、そこで取り組まれている活動を参考にしながら、新たなアイデアが生まれる。そのことから、無理のない範囲で変化し続け、新しいやり方を取り入れながら活動を展開していると感じた。



藤沢活性化協議会で作ったパンフレット

「いんでねえか ふんちゃ」



藤沢活性化協議会が取り上げられた記事

3. 松緑神道大和山の地域貢献活動

①情報提供者

松緑神道大和山 世界平和活動推進委員会事務局長 三上さん

②活動内容

この活動は地域貢献、世界平和を目的としており、松緑神道大和山を拠点として活動している。具体的にはチャリティーバザー、募金活動、ラジオチャリティなどが活動内容として挙げられる。チャリティーバザーは、1974年の世界宗教者平和会議をきっかけに世界の平和という願いを込めて五所川原で昭和50年に始まった。その後、町でもチャリティーバザーが2014年に始まり、年に1回9～11月の間に山村開発センター前駐車場で開催されている。このバザーでは、各地の入信者が寄付してくれた古着や北海道の産物(じゃがいも、玉ねぎなど)を販売している。地元の方や飲食業の方がよく買いに来てくれている。そして、市場価格よりも安く売ることによって収入を得て、その収入を社会福祉協議会に寄付したり、物自体を子ども食堂に寄付したりしている。特に、小湊支部が自発的に農産物を全国の大和山関係者と協力して集めている。

他にも、過去には町の祭りやねぶたや囃子等の出し物をしていたこともあった。町外の取り組みでは、国連世界食糧計画の東南アジアに寄付するための募金活動や認定NPO法人テラ・ルネッサンスへの協力、大学を通して食べ物に困っている留学生に寄付する等の取り組みをしている。このように、全国に信者さんがいるため、大和山自体が大きな社会資源となっており、チャリティーバザーや貧困地域への募金など幅広い活動が特徴的である。

③活動の課題

チャリティーバザー、通販等の運営は世界平和活動推進委員会が行っている。このような活動は経営の知識も必要であるものの、大和山は経営を本業とはしていないことや現在新型コロナウイルス感染症の影響で月に1～2回開催していた会議ができていないことから、運営方法を改善していかなければならないと話していた。また、委員会内で若い世代が不足していることにより、新たな考えが生まれづらいという課題も挙げられた。

④活動の展望

チャリティーバザーは、出品する商品へのシール張り等の準備を4月頃から入信者の方たちが集まって行っている。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、人が集まって行う準備作業もできなくなったため、地域に合ったやり方を見つけるなど、チャリティーバザーのやり方を工夫したいと話していた。住民の笑顔を見ることが喜んでもらえることが活動する上でのやりがいであり、町に貢献したいという思いを持ちながら、活動していきたいと話していた。

⑤情報提供者の思い

どんな活動をする地域住民は喜んでくれるかということを考えながら、時代にあった方法で地域貢献をしていきたい。また、今後も地域おこしのイベントの活性化を図るため社会福祉協議会や商工会議所とも連携しながら活動していきたいと話していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響もあって、今は新しい活動を行うよりも現状を維持している状況とのことだった。

⑥聞き取りから感じたこと

大和山の思想理念のもと、自分たちよりも他者を第一に考えた活動をしているため、町で活動する上で大きな存在だと感じた。また、活動メンバーが入信者であるため、活動する際の人員の確保ができ、活動を柔軟に行うことができると考えた。

大和山は町外、社会福祉協議会、商工会議所など他の団体と繋がりがあるといことも強みであると感じた。

4. 地域おこし協力隊

①情報提供者

平内町地域おこし協力隊 上馬さん、役場 企画政策課 江戸さん

②活動内容

地域の中には地元の人が魅力とっていなくても、外から見ると宝であると感じる資源がたくさんある。この外からの視点や力を取り入れるために平内町は平成 30 年から地域おこし協力隊の活動が始まった。この活動の目的は、町外の人目線から地域の魅力を再発見すること、地域住民が地元を見つめ直し活動を通して地元愛を育てること、楽しめるものをつくることである。生涯学習課の担当者や大学、もつけ衆、商工会とも連携し、地域住民を巻き込みながら、月に 1 回ワークショップを開催している。活動拠点であるまちなかオフィスはDIYワークショップとして地域住民と協力して作ったものであり、そのときの参加者は学生や 40 代~50 代と幅広い。このほかにも子ども教室等で椿の花クイズや椿を使ったリースづくりを行い、児童に向けた活動も行っている。活動を周知させる取り組みとしては回覧板、SNS、紙媒体などを通して、工夫して行っている。

③活動の課題

現在 1 人で活動しており、一緒に活動を行える仲間が少ないことが課題であり、地域おこし協力隊の新たなメンバー探しに苦労している。また、現在は新型コロナウイルス感染症の影響によりワークショップは行うことができていない状況である。

④活動の展望

椿の花クイズや椿を使ったリースづくりを学校の教材に取り入れることや親子で一緒にできるようにしていきたい。また、今後は協力隊のメンバーを増やすことや町のアプリを作成すること、そして、いずれまちなかオフィスを拠点とし会社を立ち上げたい。加えて、コインランドリーのニーズが高いため、会社を立ち上げた後に営業する予定である。

⑤情報提供者の思い

企画する上で地域住民がどんなことに興味があるのかは実際にやってみないとわからないからこそ、住民の声を聴きながら一緒に活動したい。また、まちおこしには前例がないこと、ルールがないこと、終わりがいいことに魅力とやりがいを感じており、活動を通して子どもたちが地域を誇りと言えるようになってほしい。「こういうのやってみよう」の一声を大事に協力隊と一緒に進めていきたいと江戸さんは述べていた。また、上馬さんが考える町の良さは青森県の中心に位置し他の地域にも行きやすいことであり、今後は中心街をもっと盛り上げていくために改善が必要であると話していた。

⑥聞き取りから感じたこと

外からの視点があることで、住民が気付かなかった町の魅力について改めて知ることができ、地元愛の形成に繋がるのが強みとして挙げられる。また、上馬さんはこれまでの活動にとらわ

れず，新しい方法を取り入れながら活動を展開しようとしていた。加えて地域住民との繋がりが非常に強く，交流の場としてまちなかオフィスもあり，地域住民も気軽に立ち寄れるという点も強みだと考える。



海岸清掃で集めたごみを用いて作成した作品



まちなかオフィス 2 階 過去の協力隊の方が作成したマップ

5. 若手農家の取り組みのサポート（農政課）

①情報提供者

農政課 農業振興係 小形さん

②活動内容

町はやませによる冷害があり農業の難易度が高い地域であることから、若手農業者間の連携の促進や情報交換の場をつくることを目的として平成 30 年から若手農業者の集まりの場を開いている。この若手農業者の集まりは年に 4 回、繁忙期を除いた時期に行われており、若手農業者（現在 4～5 人）、役場の職員（3 人）、県民局（2 人）、弘前大学平井教授（ファシリテーターとして）、地域おこし協力隊（1 人）が参加している。その際に役場の職員は若手農業者の抱えるニーズ把握を行っている。また、実際に営農している場面に足を運んだり、若手農業者が役場に來た際に声を掛けたりして、若手農業者との距離を近くするようにしている。町の農業の特徴として、法人化している農業はなく、高齢化により続けられなくなった人が子どもに引き継いだり、土地を売ったりしていることが挙げられる。

③活動の課題

町はやませによる冷害があり食物を育てる難易度が高いことから、新規農業者が少ない。そのため、高齢化と担い手の不足が課題となっている。

④活動の展望

今後は聞こえてきた農家の声を聞き、出た意見についてのサポートをすることで若手農家の実践に貢献したり、白鳥米や毛豆などの販売をしたりして、支えていきたいとのことだった。また、現在は行政が中心となっているが、これから活動に慣れてきたら若手農家が主体となり進めていくことが理想であると話していた。

⑤情報提供者の思い

実際に若手農業者が営農している場に足を運んだり、若手農業者が役場に來た際には積極的に声を掛けたりして若手農業者と役場の距離を近くするようにしている。

⑥聞き取りから感じた強み

若手の農業者で話し合える場があることや大学教授や役場の職員などとの繋がりがあったり、役場と若手農業者の距離が近く若手農業者の意見を把握しやすかったりすることからサポート体制があるといえる。このサポート体制は、若手農家の新しい取り組みのしやすさや若手として農業をすることに対する安心感に繋がると考える。

6. 白鳥を守る会

①情報提供者

白鳥を守る会副会長 小形さん

②活動内容

昭和 27 年から国の特別天然記念物に指定されている小湊の白鳥及びその渡来地を保護するための自然づくりを目的に、教育委員会が立ち上げたのがはじまりである。主な活動として、羽数調査(10月～5月、週3回)、海岸清掃活動(4月、10月)、保護活動などの自然づくりがある。加えて、ハクチョウ検定、講演会、フォトコンテスト、ボランティアガイド等を実施しハクチョウのまち再生事業として住民への周知活動を行っている。羽数調査は大変と覚えることもあるが、記事や取材で取り上げられるのが励みになっている。幅広い年代の住民が白鳥や地域について学ぶ場を設けていて、小学3年生の総合の時間で白鳥についての授業を行うなどしている。ハクチョウのまち再生事業では、「趣味・楽しむ」「読む・聞く」「意見交換」「実践してみる」「他の人に伝える」という段階を構想していて、住民の参加の仕方が明確になっている。(図1参照)

会員(最高齢73歳、主に60歳代)の方は、地域をよりよくしたいという思いが強いため、色々な地域の活動に参加している方が多い。連携先には、日本白鳥の会、八戸工業大学、東北電力、青い森鉄道、環境省、町役場生涯学習課(町教育委員会)、町役場水産商工観光課などがある。八戸工業大学との合同調査は、論文として英文学芸雑誌に掲載された。

また、白鳥を守る会のアイデア出しは、白鳥観察所や飲み会の中で行い、楽しい雰囲気の中でアイデアが出せるよう工夫を行っている。

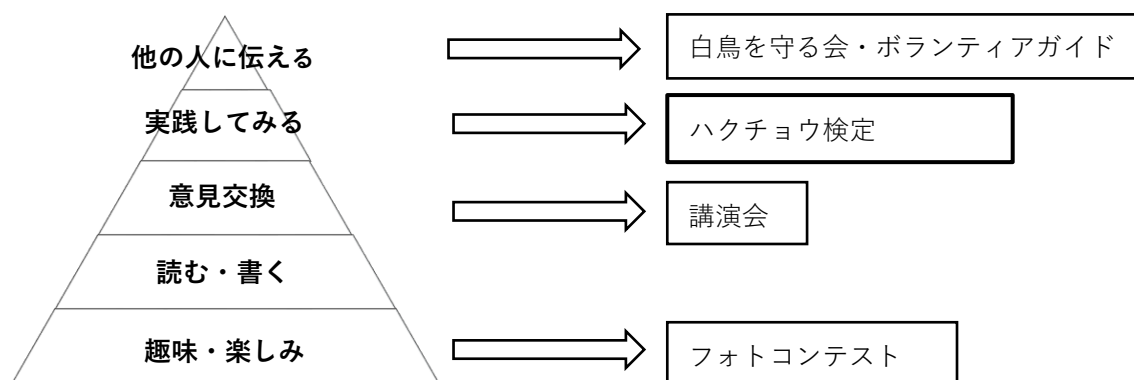


図1『ハクチョウのまち再生計画』による住民の参加の段階

③活動の課題

現状、大きな課題は挙げられていない。展望を実現するにあたり、見直すものはあるとのことだった。例えば、海岸のゴミ問題や学校や会社との連携を増やすことを考えている。

④全体に対する展望

今後の展望は趣味が収入に繋がる循環の創出を行うことである。町全体の取り組みとして行い、特に若い世代を活動に引きこみたいということだった。小形さん曰く、ばかもの、よそもの、わかもの的一生懸命やっている人を大事にして、会と地域の間に波及効果が出れば良いとの事だっ

た。また、小学生にとって町外へ出てから自慢できる地元の知識になり、今後後継者として戻ってきてほしいとも話していた。

⑤情報提供者の思い

小形さんが白鳥を守る会に参加した経緯は、始めは白鳥についてよく知らなかったため、教育長に「白鳥について何かやってほしい」と勧められたことであった。白鳥について勉強し、ハクチョウ検定の問題を作っていた。この経験から学んだ知識を他の人のために使えないかという思いから、白鳥を守る会に加入した。また、活動の継続理由には、「ボランティアだから、自分のペースでやりたいときにやれる」という白鳥おじさんの名言を胸に活動に励んでいる。また取り組みの中には大変と覚えることもあるが、記事や取材で取り上げられるのがやりがいとなっている。

⑥聞き取りから感じたこと

誰でも気軽に参加できて、気軽に勉強することができることが良さだと感じた。ハクチョウ検定が一般だけでなく、学校でも行われることで町の子どもが必ず白鳥を学び、地元愛形成や町の白鳥の知識伝承の機会になっていること、またその学びによって、白鳥を地域全体で大切にする意識が形成されていることで、町の白鳥が人懐っこかったり、再び町に白鳥が帰ってきたりすることに繋がっていると考える。



白鳥を守る会の小形さんからの聞き取りの様子



白鳥観察所に設置されている
白鳥おじさんと白鳥お婆さんの銅像

7. ほたての祭典

①情報提供者

町水産商工観光課 門脇さん

町役場水産商工観光課ホタテ係 船橋さん

②活動内容（目的含む）

ほたての祭典は、20年以上続く町最大のイベントであり、9月の第3日曜日に夜越山森林公園で開催される。青森県の水揚げ量のうち町が半数を占めているホタテのPRをすることが目的であり、「町=ほたて」というイメージを広めるために始まった。主催は町漁業協同組合であり、漁師、青年部研究会、漁協女性部等や町水産商工観光課と連携しながら行われている。このイベントではホタテ釣りやホタテバーベキュー、ほやし大会、漁協女性部が作るホタテ汁の提供などホタテに関する数多くの催しが用意されている。また、ホタテを浜値で安く購入できるという点も魅力の一つである。参加費はイベントごとに異なり、100～300円という安価で楽しめる。また、参加者の年齢層は子どもから高齢者まで幅広く、毎年町内外から1万人以上の人が集まる。PR方法は主にラジオやCM、ホームページ、ちらし、ポスターであり、「ほたての祭典はいつ開催されますか？」などイベントを楽しみに待つ人からの電話もある。

③活動の課題

現在、新型コロナウイルス感染症の影響により2年間イベントが開催できていないため、ホタテを様々な人に届けることができていない。

④活動の展望

コロナ禍において大きくPR出来ていないが、楽しみにしている方も多いため来年こそは開催したい。

⑤情報提供者の思い

イベントを通し、参加者の声が聞けることがやりがいに繋がっている。その声により漁師の人も頑張ろうと思えるため、参加者の満足感と漁師の活動意欲の向上というように相乗効果となっている。



⑥聞き取りから感じたこと

ホタテのみをメインに規模の大きいイベントをすること

門脇さんと船橋さんからの聞き取りの様子

で、「町=ホタテ」というシンプルで印象に残りやすいものになっていると考える。また、1万人以上が来るイベントであるため、町の経済発展に大きく貢献しているといえる。

8. ブルーロードライド

①情報提供者

町水産商工観光課 門脇さん

町水産商工観光課ホタテ係 船橋さん

②活動内容

ブルーロードライドは、自転車大会の開催に加えて地元のグルメについて知り、味わってほしいという思いから2014年より始まった。町水産商工観光課が主催となり、浅虫のNPO法人地域活性化協会の協力で毎年10月頃に開催されている。参加費は5000円であり県外から多くの人を訪れる。男女比は約9:1、年齢層は40~60代と比較的高くチームで参加する人も多い。夜越山から夏泊半島を走る80キロメートルのコース途中には休憩所が設けられ、青森のグルメを楽しむことができる。また、ゴールした後は町のほたてやリンゴジュース、十和田バラ焼き、海軍コロッケ、ご当地アイスなどの青森のグルメを堪能することができる。このように、自転車の競争ではなくおもてなしを重視しているイベントである。2014年の開催時にはサイクリングに加え、ジョギング、ノルディックウォークの3種目があったが、参加者の減少から2021年時点ではサイクリングのみの開催となっている。

③活動の課題

課題として町に面している陸奥湾にごみが流れ着き、海岸の景観が悪化していることが挙げられる。年に数回掃除をしているがキリがない。観光という点でも解決していきたい問題である。

④活動の展望

今後もブルーロードライドの開催を通して、県外の人に向けて町と青森県のグルメのPRを行っていく。

⑤情報提供者の思い

新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年は開催中止、2021年は参加者を県内在住の人に限定しての開催となってしまったため、今年は従来のように開催したいと話していた。

⑥聞き取りから感じた強み

夏泊半島の美しい景観があること、長い道のりをサイクリングできる場所があることが強みであると考え。参加費も平均的な自転車大会の料金に比べて安く、青森のグルメを食べることができるのはお得に感じた。また、イベントを通して町内外に町のPRができることも魅力の1つである。



2021年ブルーロードライド開催のチラシ

9. 地域学校協働活動

①情報提供者

生涯学習課 松浦さん

地域学校推進員 大水さん（東地区担当） 伊藤さん（西地区担当）

②活動内容

子どもを地域で育てる、子どもの健全な育成を図ることを目的に国からの委託事業として令和2年から始まり、町は令和3年から本格的に活動を始めた。推進員は仲介役として学校からの依頼を受け、主にボランティアを派遣し、学校行事のサポートを行う。推進員は元々「子ども教室」をしていた方で、子どもをよく知っており、先生との繋がりがあることから選ばれた。推進員は活動内容や日時が当てはまる人に募集をかけ、初めて活動する場合や希望があれば事前に先生、ボランティア、他の推進員や協力機関とで打ち合わせを行う。学校からは版画やスキー教室の見守り等の依頼をもとに、生徒の自発的な行動を促すための体制を整え、各要望に合わせて柔軟に対応しながら活動している。また帰り道の見守りや特別支援学級の生徒への支援活動も行っている。活動後は担当した先生や、ボランティアの方にアンケートを通して振り返りをしてもらい、今後の活動に役立てている。

ボランティアの方の中には地域の顔見知りの関係にある子どもたちのために活動している人も多い。

③活動の課題

課題として、ボランティアの高齢化に伴い SNS などの活用が難しく連絡が上手くできないことが挙げられる。現在は直接会うことのほかに、手紙や電話でボランティアに対応している。また、地区ごとの課題があり、東地区は活動に対してボランティアが足りていないこと、西地区は活動自体が少ないことが課題となっていて、現状は活動に積極的な小湊のボランティアが東地区と西地区に行くこともある。

④活動の展望

まだ発足したばかりなのでこれからどんどん新しい活動に取り組んでいきたい。

⑤情報提供者の思い

大水さんと伊藤さんは子どもが好きなため、やりがいを感じていた。また、学校の要望に沿い「やり過ぎず、やらな過ぎず」をモットーに推進員の介入の程度を考え活動を実施している。



地域学校推進委員の大水さんと伊藤さんから聞き取りをしている様子

⑥聞き取りから感じたこと

地域の中に活動を推進する人がいて、子どもを地域全体で育てる体制が整っている。学校と子どもとのつながりがあるため活動がしやすいと感じた。推進員は学校とボランティアの仲介役になっており、地域内での繋がりが見えやすい。ボランティアに協力するかは自由なため気軽に参加できる。

10. コミュニティバス

①情報提供者

町企画政策課 柴田さん

②活動内容

もともとは青森市営バスが運行していたが、経費削減のため平成 16 年から下北交通に業務を委託するという形でコミュニティバスの運行が開始された。町を走るこのバスは人口減少とコロナウイルス感染症の影響による町の活動の中止が原因となり、利用者は減少傾向にあるものの、通院時の高齢者の移動手段や通勤時・通学時の利用など地域住民のニーズは非常に高く、年間 6 万人ほどがバスを利用している。

コミュニティバスは 7 路線あり、利用料金は最大 200 円と安く、利用者は高齢者が 7 割、通勤・通学者が 3 割である。役場や病院、温泉、駅などの住民のニーズが高い場所を通ることによって住民の生活の助けになっている。

③活動の課題

車両が少ないこと、定時定路線で運行しているためバスの待機時間が長く、乗りたい時間帯に乘れないことがある。そのため今後はデマンド交通と呼ばれる乗り合いタクシーのサービスを開始し住民の待ち時間を減らしたいとのことだった。

④活動全体の展望

聞き取りで得た住民のニーズを具現化していくことが挙げられた。



コミュニティバスについて聞き取りをしている様子

⑤情報提供者の思い

柴田さんも乗り合いタクシーの必要性を感じており、実行に移したいと思っている。

⑥聞き取りから感じたこと

学生を含む幅広い年代に実施したアンケート調査の結果をもとに、町議会議員、行政連絡員、道路・交通管理者、警察、婦人会などで会議を行い、町地域公共交通計画を策定している。この計画が策定されたことで、住民が抱えているニーズを把握することができている。また、利用料金が最大で 200 円と比較的安いことで利用しやすいことが強みであると考えている。

11. 地域おこし婦人の会

①情報提供者

町地域おこし婦人の会代表 尾内さん

②活動内容

この活動は、平成4年から30年間続いている活動で、農家の規格外品やホタテのくずなどで何かできないか町内の女性たちが自主的に集まったのがきっかけであり、加工品を作り、様々な方法で町と青森県のPRをしている。メンバーは、ボランティアで料理好きやおもてなし好きの女性の集まりで年齢は60～70代が多い。商品は地元の食材を使い、全て手作りしており、具体的な商品には、ホタテ佃煮、ピーマンかりんとう、ニンジンかりんとう、ホタテハンバーグ、炊き込みご飯の素など現在10種類以上の加工品を作り商品化をしている。緑の村管理センターに集まり、毎週火曜日の7:30～16:30（遅いときは17:00）まで活動している。メンバー8名のうち、1日4名ほどが参加し、1日に100程の品を作り、仕込みの時間を入れると約1日半かけて作っている。商品化で得た収益は、次の商品開発等の活動費に充て活動をしている。関係機関には、東青農水産物加工協議会、商工会女性部、そば処ひらなひ、町役場の農政課等様々な機関が挙げられる。また、今はコロナ禍で難しいが、婦人の会の集まりが主婦のコミュニティとなっているため、時には世間話をしながらご飯を食べるなど気分転換の場にもなっている。

③活動の課題

婦人の会創立当時は、20名いたメンバーが現在8名で活動しており、高齢化と人手不足が課題である。企業との協力も考えたが、婦人会の商品の醍醐味である「地元の食材」「手作り」「こだわりの味」が維持できないため、断念した。担い手に関しても、平日に活動をしているため働き世代は難しい。

④活動の展望

レシピができて商品化に至らないものがあるため、それらを商品化したい。また、メンバーの減少がみられるが、活動に興味があり参加可能な人を見つけてこれからも婦人の会を続けていきたいとしている。

⑤情報提供者の思い

作った料理を商品化するにあたり、鮮度を保った加工の仕方や見た目の維持等を工夫する必要があるが、試行錯誤しながら商品化に臨みたいとしている。レシピや味、値段付け等を考える際は、消費者側（主婦目線）の気持ちになって考えており、主婦だからこそ生まれるアイデアを最大限に生かしている。「おいしかった」「欲しかった」という消費者の言葉を励みに、これからも婦人の会の現状維持を目指して活動を続けていく。

⑥聞き取りから感じたこと

婦人の会のメンバーで加工や商品化していることやそのような活動を30年以上続けている経験が強みといえる。また、役場と連携しながら県外にも進出し、なつどまり、白鳥ホーム、サボ

テン公園のイベント、アスパムでの料理教室、札幌の米屋など様々な所と繋がっていることから、今後活動を広げることができる可能性がある。その成果の一つとして、北海道や東京などにリピーターが増加していることが挙げられる。このような県外への取り組みだけでなく、地域の中で婦人の会が主婦のコミュニティとなり、女性たちの気分転換の場になっていることで町の住民のための活動になっていることが強みといえる。



平内町地域おこし婦人の会の活動場所になっている平内町緑の村管理センター内



平内町地域おこし婦人の会の活動の様子



平内町地域おこし婦人の会で作った商品

12. 資料提供を受けた団体（聞き取り未実施）

【もつけ衆】

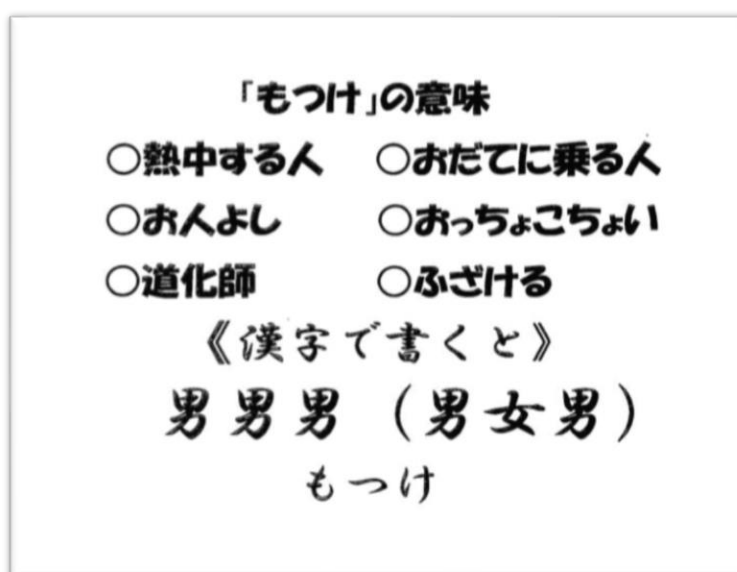
活動内容

平内町では、道草ボランティアから始まり、現在は「まちづくりサポーターズ『もつけ衆』」として地域活動参加者の減少や高齢者の孤立、地域の文化の衰退、子どもの居場所づくり、地域の防犯・防災の取り組みなど様々な課題があることを背景に立ち上げた。そこから、「ひとりがみんなのために、みんなはひとりのために」をモットーとして、地域住民同士が互いに支え合いながら地域の課題を克服できるように、地域活性化イベントや世代間交流イベントや安心安全の啓発活動など、住んで楽しい平内町を目指した活動を行っている。活動日は不定期だが、町・各団体等からの要請があればすべてに対応できる体制づくりもしている。99名のメンバーがおり、平内の各地区で活動している。メンバーには、平内のもつけ衆以外のボランティアにも参加しており、もつけ衆は地域のためなら何でもやる熱意のある方の集まりである。また、メンバーへの活動連絡手段として電話や手紙を活用していたり、活動した内容がわかるように「カワラ版」を発行したりするなどの活動報告を行っており、それらは、年会費（1人1000円）によって賄われている。

活動後はもつけ衆のコミュニティで打ち上げをすることが互いの関係を深めることにもつながり、打ち上げが活動する上での楽しみになっている。（現在は新型コロナウイルス感染防止のため、行えていない）

活動の課題

メンバーの高齢化が課題である。このことに対する課題として若者の中でチーフをつくり、補助する形をとることで、次の担い手を獲得するための取り組みを行っている。



もつけ衆の言葉の意味

第III章 平内町における地域資源の分析と活用

1. 現状から見えた課題と可能性

現時点で順調に活動し、今後のさらなる発展に挑んでいる活動、もしくは活動の継続を含め現状維持したいと考えている活動があった。これらの現状を踏まえ、課題として（１）周知の工夫による活動の維持、（２）高齢化に伴う担い手不足を挙げる。

（１）周知の工夫による活動の維持

町内には、多くの魅力的な活動があり、これらの活動は地域において重要な資源である。そのため、町内の住民に対しては、あたりまえに感じている地域資源の良さに気づいてもらえるような取り組みを行い、町外には魅力とさらに興味を持ってもらうための発信の工夫をする必要があるといえる。

（２）高齢化に伴う担い手不足

これらは若者が町内から出ていってしまうことや、新人として活動に入っていくハードルが高く一步を踏み出せないこと、活動になじみがないことが原因と考えられる。今後、担い手を育成していくためには、当事者以外の人達が活動に対して興味関心を高めたり各活動の参加者との交流を増やしたりすることが必要であり、仮に担い手がなかなか見つからなかったとしても伝統芸能保存会のDVD作成の取り組みのように活動を保存していくことも必要と考える。この保存のメリットには、町内にある活動を地域住民の功績として将来の住民に伝えることができ、担い手がいなくなってもまたどこかのタイミングで活動を再開することができたり、新しい活動をしていく際の参考になったりすることが挙げられる。

これらの現状や課題を整理する中で、活動同士の繋がりを強くすることで、それぞれの活動がより活性化するかもしれないという可能性を感じた。町内は多くの活動が行われているにも関わらず、その活動は一つ一つが独立したものであり、活動同士の繋がりが少なかったように思われる。したがって、町内にある活動同士が協同できる機会があればいいのではないかと考える。

2. 平内町の活動で協同できる可能性

（１）周知の工夫による活動の維持

先述の通り、住民に対しては、あたりまえに感じている地域資源の良さに気づいてもらえるような取り組みにより活動に対する興味関心や良さを知ってもらうことで、活動の担い手の増加や住民自身の地域生活に取り入れられれば暮らしやすさにも繋がることを期待できる。そして、町外には、魅力とさらに興味を持ってもらうための発信の工夫をすることで、イベントに参加してくれる人の数（交流人口）を増やしたり維持したり、町は良いところという印象を持ってもらえれば町内の経済発展やPRに繋がれるといえる。さらに、フォロワー（関係人口）の増加は、活動者のやりがいや誇りや活力に繋がり、町にさらに活気が出てくることも期待できる。このことから、①「地域住民に活動を周知～日常にある特別感を感じられないものに興味を～」と②「平内町の外に向けて魅力の発信～平内に行きたくなるきっかけづくり～」の２つのスローガンに基づく取り組み案を提案する。

表６に①「地域住民に活動を周知～日常にある特別感を感じられないものに興味を～」のスローガンに基づく取り組み案を示す。

表 6：①「地域住民に活動を周知～日常にある特別感を感じられないものに興味を～」
に基づく取り組み等

取り組み例	効果や活動の条件
a：学校授業への導入 白鳥を守る会が小学校で年7時間行っている白鳥の授業のように、伝統芸能保存会の活動内容を授業に導入する。	白鳥と同じように、伝統芸能も平内町の小学生に知識として伝え続けることができる。活動の担い手の確保に繋がる可能性がある。 条件として授業時間と講師を確保することが挙げられる。
b：伝統芸能についての学習 各クラスで伝統芸能について調べ、学校の給食の放送で発表する。	伝統芸能を知るきっかけとなる。友達が調べたものという理由で興味を持って放送を聞いてもらうことができる。
c：料理教室の開催 地域おこし婦人の会が学校で親子の料理教室を開催する。	親子の活動の場で地元の特産品を使った料理・食文化と婦人の会の活動を伝えることができる。また、その後家庭にその知った知識を持ち帰ることで家庭の中で周知活動や町内で行われている活動を身近に感じる体験ができる。 学校と地域おこし婦人の会の連携が必要となる。その調整係として地域学校協働活動の推進員に協力してもらうことを考える。
d：手作り弁当の配達 地域おこし婦人の会の手作り弁当を地元の会社に配達する。	町内で働く社会人にお昼のお弁当配達という自然な形で活動と平内町の魅力をPRできる。 条件として車など配達可能な環境を整備することが挙げられる。また、町内にある会社に手作り弁当の配達を行っていることをチラシ等で伝える必要がある。さらに、弁当作りのための人手と時間が必要となる。
e：レシピの周知 地域おこし婦人の会の料理のレシピを町内の住民が普段利用するスーパー（地産地消コーナーなど）に置く。	食材と一緒に手に取ってもらうことで、活動を知る機会になる。また、それがきっかけで活動に興味を持ち、担い手の確保に繋がる可能性がある。 条件として、スーパーへの設置の許可、レシピの作成者と費用の確保が挙げられる。手に取ってもらいやすくするために、イメージとして名刺サイズにし、表には料理の写真とレシピ、裏には婦人の会の場所とメンバー募集の旨をさりげなく記載。すべて打ち込みもありだが、メンバーの人に手書きで書いてもらうことで温かみが出て、惹かれやすくなる可能性がある。

日常にある特別感を感じられないものに興味を持ってもらう工夫として、住民の生活に欠かさない学校や会社、スーパーなどをターゲットとすることで確実な周知の機会を作ることができる考えた。

表 7 に②「平内町の外に向けて魅力の発信～平内に行きたくなるきっかけづくり～」のスローガンに基づく取り組み案を示す。

表7：②「平内町の外に向けて魅力の発信～平内に行きたくなるきっかけづくり～」
に基づく取り組み等

取り組み例	効果や活動の条件
a：ツアーパックを作る 他の市町村の観光地とコラボし、ほたての祭典の後に青森県内の観光地を巡ることができるツアーパックを作ることで観光客をほたての祭典に参加した後も飽きさせないさらに魅力あるイベントにする。	行きたいと思う人を増やすことができる。町を PR できる。 条件としてコラボする観光地との連携が挙げられる。観光事業を専門とするところ（自治体を含む）との繋がりが求められる。
b：イベント前後も楽しめるようなパンフレット作り イベント前後も楽しめるように町内を回る観光スポットルートやイベントで食べたご飯をどこで購入できるのかをパンフレット等で紹介する。 町に来てからパンフレットをもらうこともいいと思うが、それだけではなく事前に情報がわかるように、イベントの参加メールなどにパンフレットの PDF などのデータを送るとよいと考える。	1つのイベントだけでなく複数の町の魅力に触れてもらえる機会を作ることができる。 そのために、町内にある観光スポットや飲食店等の情報を集め、掲載許可をもらう必要がある。パンフレットを作るための経費を確保する。
c：平内まるっと発信アカウントで活動を発信 平内まるっと発信アカウントで、町内で行われている団体とその取り組みの発信をする（イベントの動画を撮影し、パンフレット等に QR コードを付けて動画に飛べるようにする。ブルーロードライドでは参加者の目線カメラなどで臨場感が伝わるようにする）。	参加場所の雰囲気が分かることで安心感につながったり、イベントのワクワク感が伝わり、さらにイベントに参加するのが楽しみになったりして、参加しやすくする。 アカウントの作成・管理ができる人材の確保が必要である。
d：誰かを誘いたくなるクーポン ペア割、学割、〇〇限定、クーポン付きチラシ等を作る。	お得感が生まれたり、誰かを誘って行きたくなったりすることで参加数を増やすことができる。各イベントの会議の際に、この話を上げる必要がある。また、チラシだけでは、周知や配れる範囲に限界があるため、学校に置かせてもらうことや SNS を活用してチラシを配ることを考える。
e：ほたての祭典のステージ発表に大学のサークルを呼ぶ ほたての祭典のステージ発表で、大学のサークル(三味線、ダンス、アカペラ等) 披露する場を設ける。	参加した大学生やサークルを見に来た人のイベントへの参加が期待できたり、イベントで食べた食べ物や活動を SNS (例：インスタのストーリーやハッシュタグ) に自然とアップしてもらったりすることで、それをフォロワーがみて宣伝効果が期待できる。 町近くの大学に声をかける。または、SNS でハッシュタグ「# 参加団体募集」のようなものを付けて、検索に引っかかるようにする。

個々にイベント等の活動を周知するのではなく、1度に複数の活動を周知する方法と「口コミ」の効果を利用して情報を拡散するという観点から、具体的方法を例として挙げた。

(2) 高齢化に伴う担い手不足

活動の担い手不足への対策として、活動に対しての興味関心を高めることや各活動の参加者との交流を増やすこと、活動の取り組みを何らかの形に保存していくことが必要であるといえる。既存の活動にはその活動内のコミュニティやルールがあるため、人によっては参加すること自体ハードルが高く一歩踏み出すのが難しいと感じてしまうかもしれない。そのため、その後押しができるような支援体制を構築することが担い手の増加の鍵になると考える。また、活動の担い手がいなくなってしまうということは、活動自体の消失にも繋がりがねない。しかし、これまで町を盛り上げ活性化に寄与してきた活動、そこに携わってきたメンバーは、町にとっての歴史であり宝でもある。よって万が一、活動を続けていけなくなったとしても DVD 等にしておくことで、その活動そして活動者の想いは消えることなく人々の心に残り続けるだろう。このことから、「担い手の育成と活動の保存～活動を後世に残す～」のスローガンに基づく取り組み案を提案する。

表 8 に「担い手の育成と活動の保存～活動を後世に残す～」のスローガンに基づく取り組み案を示す。

表 8：「担い手の育成と活動の保存～活動を後世に残す～」に基づく取り組み等

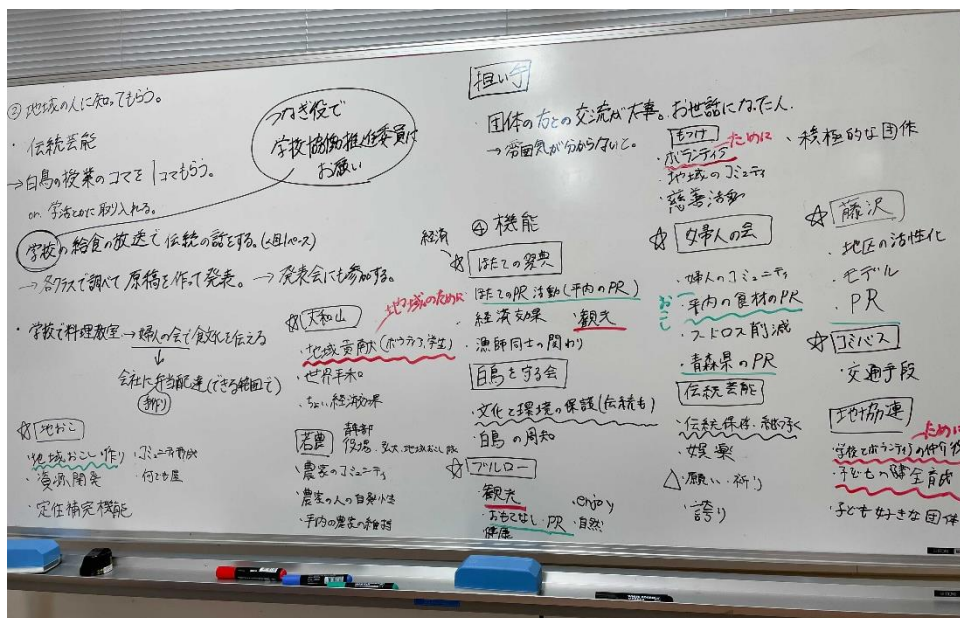
取り組み例	効果や活動の条件
a：担い手の育成 座談会のような堅苦しくない楽しい雰囲気や世代を絞らない形式で平内担い手募集合同説明会の開催を開く（地域のイベント開催時に説明会を組み入れることも考える。）	活動の参加者と若い世代の間で頼みやすい、受け入れやすい関係性が生まれ、担い手が見つかる可能性がある。 開催場所の確保や各団体の都合の良い日を探すために日程調整係を必要とする。また、話が円滑に進むようにファシリテーターが必要である。 お菓子や飲み物があると穏やかにフランクに活動ができるのではないかと考える。
b：活動の保存 伝統芸能のDVD作成の方法を参考に、町内の他の活動の記録自体も残していく。そして、作成したDVDをまちなかオフィスや学校の授業で流す。各団体に分けて作成する方法と町内の1年の活動記録として各活動をまとめる方法がある。	活動の保存だけでなく、作ったものを知ってもらう機会になる。 作成者と出演者が必要である。その例として、地域おこし協力隊の活動の一環として行い、写真や映像作成が好きな人、演技に興味のある人等に協力してもらうなどして参加メンバーを募ることを考える。 活動の保存のために撮影を行ってよいところや、それを望んでいるところを知るために、DVDに残したい活動の募集を募る。
DVD 作成内容例	
地域おこし婦人の会	調理過程や活動の様子を映像に残す（活動者へのインタビューで想いや熱意も伝わるように工夫する）。この際、レシピメインというよりも「婦人の会の活動」として残す。
白鳥を守る会	白鳥のモーニングルーティンを白鳥目線で撮影し、作成する（ルーティンの中に白鳥を守る会の様子を入れる）。
もつけ衆、地域おこし協力隊	ドキュメンタリー風の映像にして、活動の様子を伝える。
藤沢活性化協議会	森田さんによる「藤沢の活動のすすめ」を記録する。
c：パンフレットの作成 藤沢活性化協議会のパンフレットやもつけ衆の「カワラ版」を参考に、活動のパンフレットを作成する。	地域の誰も見れる記録を残すことができる。また、活動内容の見える化が図れる。 パンフレットの作成費や技術が必要になる。また、パンフレットの構成や記載内容を考えて作成する必要がある。その際、パンフレットに掲載する各活動のメンバー同士の話し合いの場を設けて掲載内容を決めていくとよいと考える。
d：レシピ集の周知＜（1）①と同様＞ 地域おこし婦人の会の商品と一緒にレシピを置く。	商品を手にするハードルを低くすることができる。また、活動の周知をすることで、そこから関心を持った住民が担い手になってくれる可能性が考えられる。 レシピを配れなかったとしても、今ある料理を文字や絵、写真にして残すことで後にそれを参考に様々な形に応用できる。

伝統芸能保存のDVD作成が他の活動にも応用ができるのと同じように、今ある活動を他の活動にも活かせるかという観点で考案した。また、活動によっては固定されたコミュニティに新しく入ることの抵抗感があり得ることから、それらを和らげるという視点を取り入れた。

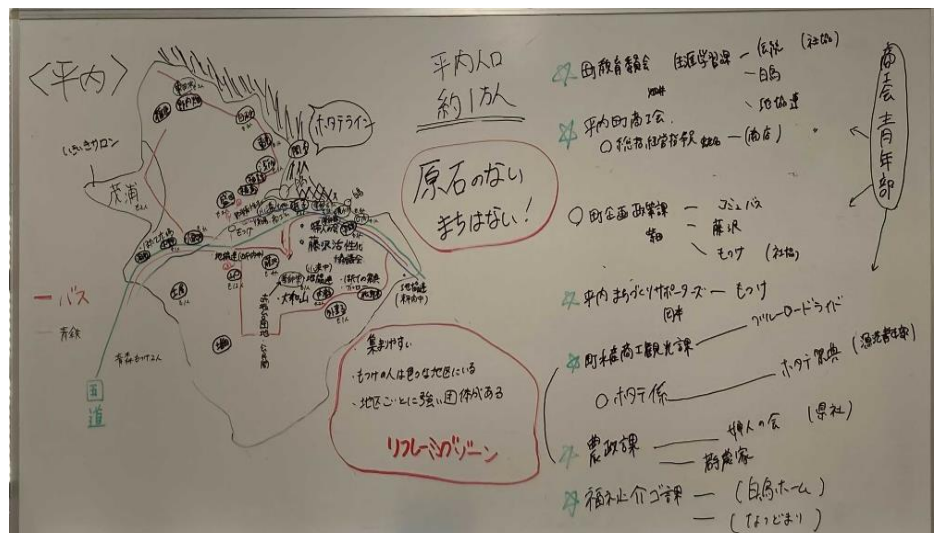
3. まとめ－暮らしやすい平内に向けて－

町で行われている活動の聞き取りから、各活動の魅力や課題について把握し、町の全体像について知ることができた。アセスメントを通して、町の活動が住民の暮らしやすさ、やりがい、コミュニティの活性化に繋がっていることを感じられた。また、共通課題として町の住民や町外に向けての活動の周知と活動メンバーの高齢化に伴う担い手不足が挙げられた。一方で、町の魅力には町をさらに良くしたいという熱意や地元愛がある人が活動に携わっていること、伝統芸能保存会など歴史ある活動があること、白鳥・ホタテ・椿といった町を象徴するものがあった。そこから、「住民が暮らしやすい平内町」について考え、地域にあるものの見直しと強みの再発見、つなぎ直しを行った。「誰のために」、「今ある活動を応用できないか」という思いと町を愛し町に貢献してきた証を後世に残したいという思いから『平内町の活動で協働できる可能性』としてまとめた。

実際に足を運んで調査したからこそ町の魅力に気づくことができ、その際に『原石のいないまちはない』という考えに至った。宝石は磨き続けることで輝きが増すように、町の活動も住民で磨き続け、活用していくことでさらなる発展に繋がるのではないかと考える。



各団体の役割や機能を整理した作業の過程



活動の範囲や連携できる機関・団体の検討作業過程

編集後記

(1) 学生プロジェクトメンバーの感想 ～地域アセスメントを通して～

社会福祉学科 3年(21期生)

安孫子 夏妃(山形県山形市 出身)

私はこの事業に参加する前は平内町について詳しく知りませんでした。しかし実際に町に足を運んで、町には沢山の興味深い地域資源を発見し、魅力でいっぱいな町であることを知りました。また、平内町の方の様々な思いや活動への熱意をお聞きして、平内町をよりよくしたいと活動する姿に胸を撃たれました。この機会は自分自身にとっても良い経験になりました。今回の地域アセスメントに携われたことを嬉しく思います。ありがとう平内！！

小松 優生(青森県むつ市 出身)

これまで一度も平内町を訪れたことがなく、町についてほとんど知らなかったのですが地域アセスメントを通して、町は沢山の魅力で溢れていることがわかりました。また、町をより良くしていきたいという思いを持っている方がとても多く、熱い町だと感じました。今回の地域アセスメント事業に関わることができて本当に良かったです。貴重な体験をさせていただき自分自身も成長することができました。また平内町に遊びに行きます。ありがとうございました。

鳥越 日向子(青森県上北郡おいらせ町 出身)

聞き取りから町のために熱心に取り組んでいることを知り、私たちの質問に対して活動のことを楽しそうにお話している様子を拝見して、平内町のことを本当に好きなのだと感じました。楽しみながら地域のために活動に取り組めることは素敵だと思います。私もそのような人になりたいです。この事業を通して、沢山の学びと刺激を得られ、参加できたことを光栄に思います。平内町のこと大好きです。

中島 駿(岩手県花巻市 出身)

私は、地域アセスメントを行う前は平内町がどういうところかも知らない状態でした。しかし、各活動のアセスメントを通してその魅力に気づき、素晴らしいものがたくさんある町という認識に変わりました。今回のことから、その土地について知る楽しさや自分たちの視点から考えを提案できたことなど、私にとって貴重な体験ができました。また、やりがいを感じつつ、充実した時間を過ごすことができました。平内最高！

平沼 杏美(青森県八戸市 出身)

聞き取りをさせていただいた皆さんは、自分が参加している活動のことを楽しそうに話してくれる方ばかりで、本当にその活動が好きなんだと伝わってきました。このプロジェクトを通して地域資源の新たな可能性を見つけ、平内町に住む皆さんがどうしたら過ごしやすくなるかを考えることがとても楽しく感じました。大変貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。平内町大好きです。

松田 優花（青森県八戸市 出身）

平内の地を実際に訪れ、多くの人と触れ合ってみて魅力に溢れた温かい町だと感じました。全国的に少子高齢化が進み人と人との繋がりが希薄化している中、平内町では様々な取り組みを通し、地域の活性化に向けて活動していることに感動しました。普段何気なく暮らしていた自分の地域でも、多くの人や資源によって成り立っていたのだと気づかされました。このプロジェクトを通し私も地域に貢献できるような活動をしていきたいと強く感じました。次は平内町のほたてを食べに行きたいと思います！

(2) おわりにかえて 研究代表 宮本 雅央（北海道広尾郡大樹町 出身）

今回のプロジェクトは、大学と自治体の協働による地域アセスメントの活動モデルを残すことを念頭に企画しました。冒頭で述べたように、青森県型地域共生社会実現に向けた事業の一つとして、新規事業創設ではなく新たな観点で地域資源を捉えなおし繋ぎなおすことで、地域住民にとってこれまでと異なる機能や役割を果たす活動になる可能性を探る、という趣旨で学生たちにアセスメントに臨んでもらいました。大学で学習する社会福祉の専門領域とは異なる知識や情報が必要なこの地域アセスメントに、彼らには戸惑いながらも前向きに、何より楽しんで最後まで取り組んでもらえたように思います。

さて、様々な事業を運営していくにはチームが必要であることはもちろん、やりたいことを実現するアイデア、必要条件の整理など問題解決に向けた思考が必要であることはいうまでもありません。問題解決の思考過程には様々な知識や情報が必要であり、それらは時に専門知識といわれたり教養といわれたり、または土着の知（地域の知恵袋）として伝わっているものであったりと様々な表現がされます。これらをまとめ上げ、具体的な方法で少しずつ形にしていくには、情報収集にあたる熱意だけでなく、その“志”が向かうべき方向の基盤と骨格になります。平内町の皆さんが語ってくれた熱意は、その志を直接的に感じられるものであり、それらは学生らにとってとても衝撃的で魅力的に見えたことと思います。ですから、私は、彼らには今回の聞き取りを通じて平内町の魅力とともに情報を提供していただいた皆様の熱意が十分に伝わったと確信しています。このことは、新規フォロワーとして彼らだけでなくその友人や知人などが巻き込まれるきっかけができたともいえます。そして、それらのエネルギーは、巡り巡って必ず平内町を盛り上げる力になることでしょう。

最後に、今回の短いプロジェクト期間の中でも前向きに取り組む、チームとしてこのような成果を上げられた今回のメンバーを誇りに思います。そして何より、本プロジェクトの趣旨に賛同し聞き取りにご協力、または惜しくも聞き取りにはいたらなかったものの快くこのプロジェクトを受け入れていただいた平内町内の皆様に心より厚く御礼申し上げます。たくさんの方々のご協力によって得られた本報告が次のエネルギー源として伝わることを大いに期待し、報告書として残したいと思います。

令和4年 3月

青森県立保健大学 健康科学部 社会福祉学科 宮本 雅央

令和３年度 地域アセスメント事業研究

プロジェクトメンバー

青森県立保健大学 健康科学部社会福祉学科 ３年 （21 期生）

安孫子 夏妃

小松 優生

鳥越 日向子

中島 駿

平沼 杏美

松田 優花

（五十音順）

研究代表・インタビュー指導・編集

宮本 雅央（青森県立保健大学 健康科学部社会福祉学科 講師）

学生から見た地域の強み再発見 in 平内

令和３年度 地域アセスメント事業研究報告書

発 行 2022 年 3 月 22 日

発 行 者 青森県立保健大学

〒030-8505

青森県青森市浜館間瀬 5 8 - 1

TEL：017-765-2000

編 集 責 任 宮本 雅央